

岡崎義恵著作集 1

日本文学新論

宝文館刊行

昭和三十六年七月十日 第一刷発行

日本文芸学新論

定価 1200 円

著者 岡崎義恵

発行者 宝文館

(代表) 伊崎治三郎

印刷者 根本力三

東京都新宿区東大久保二ノ七八

発行所 株式会社 宝文館

東京都千代田区神田神保町三ノ一七

振替東京二八〇番

印刷・中教印刷
製本・大光堂製本

序

日本文芸を、単なる歴史的現象や、単なる言語表現体としてでなく、一つの芸術として見ようとする立場は、早くから私の求めるところであつたが、これを「日本文芸学」の名で呼ぶことは、昭和九年十月、岩波書店の雑誌「文学」が、「日本文芸学」という特集号を発行した頃からである。この雑誌に寄稿した「日本文芸学の樹立について」という論文にも書いておいた通り、その頃までの学術的常識からいうと、「日本文芸学」という名称には、疑念を抱く人が多いはずだと思われたので、私はその成立し得る根拠を、まず十分に考えようとした。

日本文芸の研究は歴史以外のものではないという考えや、日本文芸といつても文献や言語にほかならないという考えに対しては、私は、日本文芸も文芸という芸術の一つにはかならないという立場から、どのような論議をも厭わないという気持を、今日まで持ち続けている。しかし、この論議を十分に尽すことのできる機会に恵まれず、私は、二十五年前とあまり変らないような、満たされない気持で、今日もなお一般に理解されにくい「日本文芸学」というものを抱いている。

序 私の考えは、本書巻末の目録に列挙したように、これまでかなり多量な著書・論文として公にして

あるが、自著の単行本の中に収めて刊行することのできなかつた論稿を、ここに収録した。これは先に刊行した「文芸学概論」のような、体系のある著述ではないが、文芸学及び日本文芸学の根本問題については、大体触れていると思つてゐる。細部の問題や、具体的な研究は、もとより本巻の内容として取上げようとしたものではない。

本書第四部に収めた論議・応答の文については、このような機会を与へられたことに對し、深い感謝の念を抱くものであるが、最後まで応酬を重ねる機会が得られなかつた点については、やはり遺憾の情を禁じ得ない。それに、巻頭の小稿「文芸学と日本文芸学」の中で軽く触れておいた、時枝学說に對する所感は、実はもつと精密な論を立てるつもりで、そのことは、本著作集の「万葉風の探究」（三八三ページ）に書いておいたのであるが、本巻の紙数が予定よりも超過しそうになり、内容見本の中に予告しておいた「文芸史の課題」の部を、「日本文芸の様式と展開」の中に移さざるを得なくなつたような次第で、極めて粗末なものになつてしまつたことを残念に思う。

私は文芸学というものを、芸術学の一部門として認め得ることを信じ、また、その文芸学の一部門として、（史学の一部門としてでなく、）日本文芸学というものを認め得ると考へてゐる。これに對する反對説は十分に傾聴し、これを反駁し得る用意を怠らないつもりであるが、何故か学界はこのような問題にあまり好意を示さず、私の努力は徒勞に近いもののようにも思われて來た。私は自己の學說を他に押しつけようとする氣持は少しもなく、ただ、他からの排撃に對して防衛的言辭をつらねる以外

のことはして来なかつたつもりである。このように消極的な、正当防衛的態度は、恐らく迫力に乏しいもので、私の「日本文芸学」というものも、あるいは少数の理解者を得るだけで満足しなければならぬものかも知れない。元来、私は浮動常なきものにたよらず、なるべく不動のものを信じようとするのであるから、自分の説も現在多くの賛成者を得ることを目ざすよりも、多少知己を百年の後にまつという気持がないでもないのである。

昭和三十六年六月

岡 崎 義 恵

岡崎義恵著作集1

日本文芸学新論

目次

序

第一部 文芸学の根本問題	一
--------------	---

文芸学と日本文芸学	三
-----------	---

様式と類型	三
-------	---

様式の意味	四
-------	---

文芸の日本的様式	七
----------	---

——様式論と史学との関係——

一 様式とは何か	七
----------	---

二 文芸と歴史……………七二

三 文芸の日本の様式……………九四

文芸思潮論……………一二〇

一 文芸思潮とは何か……………一二〇

二 世界文芸思潮論……………一二一

三 日本文芸思潮論……………一二六

第二部 世界文芸と日本文芸……………一二四

日本文芸の世界的意義……………一二五

近代日本文芸の世界性……………一二六

日本文芸の比較研究……………一二六

世界文芸と日本文芸との関係……………一二七

外国文芸に与えた日本の影響……………一二九

一 日本を題材とした外国文芸……………一九三

二 日本文芸の影響を受けた外国文芸……………一九五

第三部 古典と伝統……………一九九

力を与えるものとしての古典……………二〇一

現代文芸の源泉としての古典……………二〇四

現代に生きる古典……………二〇四

日本文芸の伝統……………二二三

人間の伝統……………二五六

第四部 文芸学に関する論議……………二六九

日本文芸学と国文学……………二七二

一 日本文芸学の将来……………	二七
二 国文学について……………	二七
三 国文学以後……………	二七
文芸学論議の出発点と到着点……………	二九
日本文芸の時代様式……………	三〇
文芸の東洋の様式と西洋の様式……………	三〇
——日本文芸の世界的位置——……………	三〇
文芸学的弁明……………	三五
古典的価値と歴史的制約……………	四五
——「文芸学概論」に対する疑義について——……………	四五
文芸学に対する三つの疑問……………	四九
本書収載論文……………	四六
本書以外の関係論文……………	四〇

第一部 文芸学の根本問題

文芸学と日本文芸学

一

文芸の研究は様々の方法で、様々の方面におこなわれているが、どのような進み方が正しいのであろうか。この問題は、私が大学に入学して、正式に文芸の研究に志した時から、私に与えられた課題として抱えているものである。どのような方法で、どのような方面に進もうと、それは研究者の勝手であるといえ、それまでのことである。しかし私は、大学に入つて哲学・心理学・美学・社会学・言語学などという名のついた、やかましい学問の講義を聞き、学問には対象や方法について、むずかしい理論的な規定のあることを知つた。また、史学・文献学などに属する実証的な学問の特殊講義をきいてみると、これはまた驚くような綿密な手順で、調査・探究の限りをつくすものであることを知つた。大学の学問は單なる常識や物好きでは通つて行けないものであると思ひ、私は自分が最高学府

の門をくぐつたことをひしひしと感じたのである。

理論や実証のきびしさを守ろうとするのは、むろん真理を明らかにするためであるが、真理のための真理というような目的を立てるとすれば、それはあるいはアカデミックな心構えとして、これを斥けることもできるであろう。しかし、どのような目的を持つにもせよ、ともかく真理を明らかにすることによつて目的を遂げようとする、学問的方法を用いるならば、この学問的方法のきびしさは守らなければならぬであろう。むろん、ただただ学問的に主張するのは、学問以外の世界のあることを忘れてゐるもので、必ずしもそれに従ふ必要はないかも知れない。けれども、他のどのような方法を導入するにしても、学問の道としては、その範囲内の問題においては、厳密な学問的方法に外れることは、邪道であり、誤謬であるといわなければならないであろう。

今、文芸の研究に志すとしても、これを学問として立てる以上、学問の道によつてその対象を定めその方法をきめなければならない。私がそもそも文芸の研究に志した動機といえば、自分が文芸を愛し、文芸を尊いものと感じたために、その愛し尊ぶものの実体を深く究め、それが何故に愛され尊ばれるのか、自分がそれを愛し尊ぶのはどういうわけであるかということを、明らかにしたいと思つたからである。すなわち文芸に対する愛と、その価値を認める心とが、まず私の内部にあり、それを更に学究的な知性にかけて明らかにしようとする心が、それと同時に私の内部にあつたからである。簡単にいえば、文芸に対する愛情と、それを知ろうとする知性から、私の文芸探究の道はひらかれた

のである。およそ文化現象に対する学問的研究は、この二重の動因から起るに相違ない。自然科学の研究は、人間にとつて害悪になるものを除こうとする目的から出発することも多いので、研究の対象を憎み、それを減す方法を考えることもある。ところが文化現象の研究は、元来価値のあるもの、というよりも価値そのものを究め、それを守り昂めることを目的として行われるものであるから、対象に向かつての愛と知が基礎になる筈のものである。この愛と知の何れを欠いても、文芸の学問は成立しないであろう。

文芸を研究するものの中には、往々この二つの成立根拠の一つを忘れているものがある。文芸に対する愛さえあれば、文芸の研究はできると思っているものは、なるほど文芸を味い、文芸作品や文芸作家と一体になり、文芸がよくわかつたと感じるかも知れない。しかし、これは一つの文芸体験であつて、文芸の愛好者・鑑賞者ではあつても、文芸の学問的研究者ではない。文芸の愛読者や批評家には、このような人が多く、その発言は文芸体験のよい表現ではあろうが、文芸の学をなすものとはいえないのである。

これに反し、文芸を対象として学問的研究をしている人の中には、文芸の面白味や、文芸の価値にはあまり関心がなく、文芸と呼ばれるものについて、何か学問上の業績を挙げようと努力している人がある。このような人は実は文芸という名のついた作品の中から、言語や社会的事実や、人物の伝記や、または道徳・宗教その他の思想内容などを採り出して、満足していることが多い。これは立派な

学者かも知れないが、文芸を研究する学者であるとはいえないのである。

そこで、真の文芸学者は、この二つの行き方を兼ねたものの中にあるであろう。それは文芸に対する愛と知を兼ね備えた人でなければならない。ここに文芸学というものが存するのである。文芸学は文芸を愛好し鑑賞すると共に、文芸の価値や文芸体験を、知性の網にかけて学問的成果にまで導いて行くことである。いわば文芸そのものを科学化することである。文芸をただ文芸として、そのままに置くことでもなく、また文芸を材料として、その中から他のものを探り出して行くことでもなく、文芸を文芸として取上げ、それを科学的成果の形に鋳直すことであると思われる。

しかし、このような文芸学的立場に対して、その成立を疑うものがあるであろう。その一つは、文芸というものが、科学の対象にならないものではないかという考え方である。文芸はただ、文芸を製作するものと鑑賞する者だけに文芸である。文芸体験は文芸の中に没入するものだけに捉えられるもので、科学化すればもはやそれは文芸ではなくなるという説である。それは正にその通りである。生活体験は生活するものだけに与えられたものであり、生命はどういうものかということは、ただ生きていくものだけにわかるものである。文芸体験も生の一現象である以上、文芸の中に生きるものだけにわかるものであるともいえるであろう。しかし、そういえば、生命の諸現象、生活の諸体験は、すべて科学・哲学の対象にならないということになる。ところが、あらゆる生命現象や生活事象は、それを研究する科学・哲学を持つている。そうした学術は、生命や生活を科学化して捉えることであ

るが、生命や生活そのものではないのである。そこに成立する学的成果は、むしろ本来の生命や生活ではないが、しかし生命や生活を科学的形態に再構成したもので、もとの生活や生命とは全く別の何物のかであるとはいえないのである。

文芸学の成果として提出される文芸というものも、もとの文芸ではなく、文芸の科学化された形ではあるが、文芸以外のものを捉えたわけではないのである。すなわち文芸だと思つて、言語や道德やその他様々の社会的事象などを取出して来たものとは違つてゐるのである。それ故、この科学化された文芸は、或る方法では、またもとの文芸にもどすこともできるであらう。比喻は適切でないが、生魚や生肉を罐詰にしたり、冷凍したりするようなもので、罐を切つたり、暖めたりすれば、生魚・生肉の味には還るものを、一度食えない状態に化成したようなものである。魚や肉を石や瓦に化してしまふわけではないのである。これを疑う人は、恐らく一切の生命現象を科学の対象とすることを疑うであらう。それは一切の生物学的、文化科学的、史学的研究などをも疑うであらう。これは科学の否定に近いともいえないことはない。文芸だけが学問の対象にならないという考え方は、およそ根柢のないことである。

文芸学に対する今一つの疑惑は、なるほど一切の生の現象と同じく、文芸現象もまた学問の対象となるかも知れないが、その対象となる文芸というものが、確かな対象規定を許さないもので、何が文芸であるかということが定めにくいものである以上、それを対象として措定することは困難で、文芸